

# ロータリー通解（その1）

ロータリー理念研究委員会  
副委員長 平山 勝己  
(千葉若潮RC)

ガイ・ガンディカーのロータリー通解(A Talking Knowledge of Rotary) に、ナサニエル・ホーソンの気高き岩頭(The Great Stone Face) が紹介されている。この物語を私は小学生の時の教科書で読んだ記憶がある。

私の記憶の中のこの物語は次のような内容だった。

〈山間の谷間に大きな人の形をした崇高な岩がある。インディアンの言い伝えにこの地域にいつか偉大な人物が現れ、その人の姿はこの岩そっくりになるという。〉

この言い伝えを謙虚で素直な心を持つ村の少年アーネストは信じこの岩を毎日眺め、岩と会話し、岩と思惑して成長していく。

あるとき偉大な人物が現れ、この岩そっくりだといわれる。しかし時の経過とともにその人もいつか忘れられ、そのような人物が現れては消えていく。

アーネストは真に偉大な人物が現れるのをこの岩を見つめながらじっと待つ。そのうち彼の内面も成長し、善と愛に満ちた彼の言葉は村の人から尊敬され、村の人からアーネストこそ崇高な岩そっくりだといわれるようになる〉

このロータリー通解は1916年に著されているが、当時のロータリアンのロータリーに対する情熱を知るうえで重要である。

ガイ・ガンディカーはこの冊子の中でロータリークラブとは〈ロータリークラブの会員を真のロータリアンに改善すること〉と書いている。

気高き岩頭のアーネストをロータリアンの理想的なモデルとして登場させている。

また米山梅吉も〈ロータリーの例会は人生の道場である〉、それにポールハリスの〈会員の人格の向上〉それらの言葉はロータリーを修練の場としてとらえている。

今のロータリーは5年のうちに100万人入会し、

100万人退会していると聞いている。もしそれが事実であれば、変化の激しい組織であり、不安定な組織でもある。

ロータリーの財産は〈ロータリー会員〉である。その貴重な財産を組織として地道に育てていく。根気よく育てていく。時間をかけて育てていく。指導者に育てていく。

ロータリーはそのような考え方を組織運営の基本としてきたのであろうか？それは違うような気がする。

組織が大きくなり個人よりも団体が重要視されるにつれて〈修練の場〉としてのロータリーなど必要なくなってきたからかもしれない。

ガイ・ガンディカーの〈ロータリークラブの会員を真のロータリアンに改善すること〉この言葉は初期のロータリアンが見た夢または幻想であったとしか思えない。

しかしそれは楽しい夢だったに違いない。

ロータリー理念研究委員会では皆さんのご意見を求めています。

## ※参考文献

ロータリークラブ—その理論と実態と批判—

小堀憲助著

ロータリー通解 ガイ・ガンディカー著

小堀憲助 訳並びに解説

THIS ROTARIAN AGE PAUL P・HARRIS

米山梅吉訳

気高き岩頭 源流の会副会長 塚原房樹著

第2790地区ロータリー理念研究委員会

海寶勘一(千葉西) 平山勝己(千葉若潮)

大内 啓(柏南) 島 正彦(館山) 松田泰長(成田)